

■ 目指せ Санктペテルブルグ ～ 帝都は華麗な工業都市？

本誌7月号のモスクワ編に続いて、6月のロシア旅行で訪れたもう1つの大都市、 Санктペテルブルグ（以下、ペテルブルグ）について書いてみたい。同市がソ連時代にレニングラードと呼ばれていたことを、（不勉強な）高校生や中学生は知らないかもしれない。同市の名称が革命前の現在の名に戻ってから既に20年が経過したので、それも無理はないかもしれない。しかし、レニングラードの名は随所に残っている。まず、モスクワのペテルブルグ行きの列車の始発駅の名前はレニングラード駅である。余談だが、モスクワの始発駅には、キエフ駅、ミンスク駅など、目的地の名称が冠されている。また、ペテルブルグ空港の国際識別コード（スーツケースに張られるタグでおなじみ）は、レニングラードの頭文字を取ったLEDである。そして、日本でも人気の高い世界的バレエ団の名前がレニングラード・バレエなのは、良く知られているところだ。

ペテルブルグは、エルミタージュ美術館やエカテリーナ宮殿に代表される壮麗な建築物で知られ、運河とネヴァ河に囲まれた「北のベニス」とも呼ばれる美しい街である。市内外の大半の有名建築物を中心に、周辺を合わせると30を超える建造物などが世界遺産に指定されている、まさに、世界遺産マニア垂涎の都市である。しかし、空港を出たバスは、暫くは工場と倉庫群の中を疾走し、ロマノフ王家の帝都の面影は一向に現れない。それもそのはず、同市の周辺はロシア有数の工業地帯であり、特に自動車産業が盛んなため、「ロシアのデトロイト」と呼ばれているようだ。筆者も、ロボコップ・シリーズでダウントウンの荒廃が有名になった米国のモータウンと、ロシアの京都とも呼ぶべき古都が比較される存在であることには驚いた。しかし、市街地に近づくとも工業地帯は消え去り、高さ、形状、色彩が統一された世界遺産の様子が急に現れてくる。

モスクワに比べて、ペテルブルグは国際観光都市としての華やかさ、賑やかさ、開放感に溢れていた。特に、初夏は白夜の観光シーズンのため、いたるところからドイツ語、フランス語、スウェーデン語などが聞こえてきた。モスクワでは見かけなかった英語標記も多くなり、ほっとした気持ちになったのは確かだ。モスクワでは、地下鉄の駅名、案内板だけでなく、マクドナルドやサブウェイ（サンドイッチ）の看板もキリル文字のみで書かれていた。最初は「首都にしては何と観光客に不親切な」と思ったのだが、これはかつてのフランスのように、「母国語を守る」という方針からあえて行っている政策だそうだ。

ペテルブルグでは、ツアーで定番の観光地を回った。すなわち、スパース・ナ・クラヴィー教会（血の上の救世主教会）、イサーク寺院、運河クルーズ、エルミタージュ美術館（冬の宮殿）、ピョートル大帝の夏の宮殿、エカテリーナ宮殿などである。後者の2つの宮殿は市街地から車で1時間弱の郊外にある皇帝の別荘だが、そのスケールと華麗さには圧倒された。夏の宮殿の庭園の突端にはフィンランド湾が広がっているが、そこに立った時には、「遙か最果ての地に来たものだ」という感慨が湧いてきた。もっとも、現地の人には日本（極東）こそが最果てなのだろうが。距離的にも、心理的にも、日本からは遠く離れたペテルブルグだが、ネヴァ河畔には日露を結ぶ記念物が浮かんでいた。それは、日本海海戦（日露戦争）に参戦して壊滅したバルチック艦隊の中から、からくも遁走した巡洋艦オーロラ号であった。負けた戦いの船が展示されているのには訳がある。

この船はペテルブルグに戻った後、1917年のロシア革命の際に冬宮（現エルミタージュ美術館）を攻撃する際の号砲を鳴らしたことでも有名なのだ。



【巡洋艦オーロラ号。背後の島には歴代皇帝の墓がある】



【スペース・ナ・クラヴィー教会を背にして。
時間は午後11時】



【市内の至るところにある運河クルーズの発着場】

以前のモスクワ編において、「ロシアの魅力はギャップにある」と書いたが、ペテルブルグはロシア革命勃発の地であり、独ソ戦では900日間に渡り完全包囲されて、餓えと寒さで50万とも150万ともいわれる市民が死亡した暗い歴史を持っている。しかし、それとは正反対に、チャイコフスキー、Достоевский（←文末のヒントを読んでキリル文字に挑戦！）、プーシキンらが散策した場所が随所に残り、今でも夜な夜な最高峰のオペラ、バレエ、クラシック演奏が繰り広げられる、世界屈指の文

化都市でもある。筆者も普段は芸術に疎いのだが、ロシアに来た以上は世界最高峰を体験しない訳にはいかないと考え、バレエのチケット手配を試みた。モスクワのボリショイ劇場が修復中で閉鎖されていたため、ペテルブルグのマリンスキー劇場（世界遺産）でキーロフ・バレエを見ることにした。日本から旅の一カ月前に同劇場の英語サイトにアクセスし、クレジット決済で「真ん中、5列目」の席を予約することに成功。直後にスマートフォンで予約確認のメールを受けたので、当日はその画面を劇場窓口で見せるだけで即座にチケットに交換してもらえた。この一連の流れは実にスムーズで驚いた。なお、同劇場のチケットは予約段階で「ロシア国民／長期在留者」、「外国人」に二分されており、前者の値段は後者の半分程度である。試しに予約時に前者で申し込んでおくと、運が良ければ格安で入手できるかもしれない。ただし、当日の窓口でどのような対応をされるかは予想がつかない。日により、対応者により扱いが異なる可能性がある。それがロシアなのだ。



【マリンスキー劇場でキーロフ・バレエのカーテンコール】

○ 船で回って、足で歩いて楽しむペテルブルグ

ペテルブルグは「北のベニス」と呼ばれるように、街中を縦横無尽に大小の運河が貫いている。そして、建物は運河に面して高さ、色調、デザインなどの統一を保つように配慮されている。筆者もベニスをはじめとして多くの欧米の観光都市を旅した経験があるが、ペテルブルグはそのどの街とも異なっていた。冒頭で「古都」と書いたものの、実際にはピョートル大帝が18世紀初頭に更地の湿地帯に建設した人工都市であり、歴史もたかだか300年程度である。しかし、それだけに最初から計画され尽くした都市であり、街全体が「XXランド」や「△△村」のようなテーマパークの趣を持っている。そうは言っても、1917年のロシア革命までは帝都であったため、荘重かつ華麗な印象に溢れてお

り、安直なテーマパークのようなチープさは皆無である。ここまで書いてきてお分かりの通り、ペテルブルグを観光するならば、まず、街のいたるところから出ている運河クルーズ船（1時間で周遊）で沿岸の景色を楽しむことを第一にお勧めしたい。続いて、どこかに行く時にも、地下鉄やバスではなく、運河沿いを30分から1時間程度で散策すると、船から観た建物や公園を違ったアングルから楽しむことが出来る。

筆者の場合、カザン大聖堂（これも世界遺産）の眺めが良いことで知られる、ドム・クニーギ（ロシア人は誰でも知っている巨大な本屋チェーン）の二階のカフェで一服した後、タクシーで10分程度のマリインスキー劇場に行こうとしたところ、交渉で「700ルーブル（2,100円）」という法外な値段を吹っ掛けられたので、やむなく運河沿いを30分ほど歩く羽目になったが、結果的にはとても素晴らしい散策を楽しむことが出来た。ちなみに、タクシーとの価格交渉は日本、英国などの例外を除くと世界の「常識」だが、現地滞在歴が長い親族に言わせると、「数台が並んでいるところで価格を競わせる」のがコツだそう。なお、そんなボッタクリ寸前の経験（当然に予想の範囲）はしたものの、バレエ観劇が終わった後、少し離れたメトロの駅に行く際に通りがかりの数名のロシア人に道を尋ねたが、全員がとても親切であり、最後は大学生カップルが駅まで先導してくれた。モスクワ編でも書いたが、ロシア人は基本的にはとても親切で、かつ、親日的なのだ。

○ 最後に：キリル文字の勧め

ロシアを旅してみたいが、どうにもあのアルファベットがひっくり返ったような文字（キリル文字）が苦手だという人が多いかもしれない。筆者も以前はそうだった。しかし、「Cは英語のS、PはR、HはN、И（Nの逆さま）はI、ДはD」といった法則を覚えると、急に街中の看板が面白いように分かり始める。例えば、交差点には必ず「СТОП」という道路標識があるがПはPなので、発音すると「ストップ」である。また、ATMの上に「МИНИ ОФИС」と書かれていて、なんじゃこりゃ？と思ったが、ФはFなので、口で読み上げると「ミニ・オフィス」であった。勘の良い方は分かると思うが、日本のカタカナの単語のように、かなり英語系の外来語がそのまま入ってきており、単にキリル文字に置き換えられているだけなのだ。

以上、本稿をモスクワ編とともに読み進んできた皆さんが、ロシアを旅してみたいという気持ちになったのであれば、筆者の望外の喜びである。 [神野 新]